

「日々の理科」(第 1371 号) 2018 (H30), -4, -8

「最後のオーロラ」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

北極圏の小さな駅の駅舎に、オーロラ観測カメラを設置したのは、2004 年である。私と日本の友人、スウェーデンの友人で始めたプロジェクトだ。以来 14 年間、ほぼ途絶えることなく、膨大なオーロラ写真を日本のサーバーに送り続けている。



カメラが設置してあるのは、インランズバーナン(内陸鉄道)の駅舎だ。北緯 67 度のヨックモックという北極圏の町の近くだ。夏の間、一日一往復だけ気動車が発着する。この駅舎の事務室に、デジタル一眼レフカメラほか 5 台のカメラを設置している。当時はインターネットもない村で、まずは回線をひいてもらうことから交渉を始めた。何か新しいことを始めるには、環境から変えないと成功しないことを学んだ。



このオーロラ観測システムの特徴は、すべて東京から遠隔操作が可能ということだ。7000km も離れた場

所にあるデジタル一眼レフカメラのすべての機能を、日本から操作できる。



2018,-4,-7 (スウェーデン時刻) 撮影

オーロラの観測が可能なのは、8月下旬から4月上旬までである。春分を過ぎると、日本でも昼のほうがり長くなるが、それは北極圏でも同じだ。日に日に観測可能な時間帯が狭まってくる。しかし今シーズンは、4月に入ってから太陽活動が活発になり、すばらしいオーロラを観測している。春独特の、上部が紫色に染まる、実に美しいオーロラだ。左下の写真と上の写真は、同時刻に撮影されたもので、西側と北側のカメラがとらえたものだ。(2 ページ目に拡大写真)



このあたりの北極圏では6月になると、一日中太陽が沈まない「白夜」になる。4月上旬では白夜にこそならないが、すでに北の空の地平線には薄明が残り、その上に緑と紫の二色のオーロラが舞っている。何と云う光景だろうか。あまりにも美しく、あまりにも悲しい、最後のオーロラの姿だ。この光景に比べて、人の悩みや、怒りや、争い事など、何と小さく、何とばかばかしいことだろう。オーロラはそのことを教えてくれる、「宇宙の渚の光」なのかも知れない。

